

各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさと駅

(16) 犬飼・三重・朝地

初版：2007年6月15日

66 犬飼

水運で栄えてきた町



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

◀ 近代まで通船が続いた犬飼の船着き場跡付近

■大野の交通要地

豊肥本線は犬飼まで、大野川の悠々とした流れを左の車窓に見て走る。犬飼は大野本流に野津川、茜川、柴北川の三支流が合流するところで、ここから川幅がぐんと広がる。

この地は、大野川の下流域と中、上流域を結ぶ要(かなめ)の位置にあり、鉄道は本流沿いに「大きな野、の山間部」に入って行くが、国道は10号線がここで57号線、326号線を分けるなど、交通の要地である。

歴史的にみると、この要地をひととき重要なものにしてきたのが、大野川水運の港があったことだ。

大野川通船の概略については日豊本線の鶴崎駅で紹介した。

通船を本格的に始めたのは岡藩で、明暦2(1656)年に犬飼に船着き場を設けている。それまでは少し上流の鶴の瀬というところに船着き場があるにはあったが、藩がこれを下流に移すとともに港としての機能を充実させたわけで、それまで田原組下津尾村に属する小集落にすぎなかった犬飼が、これを機に藩内で有数の町となっていった。

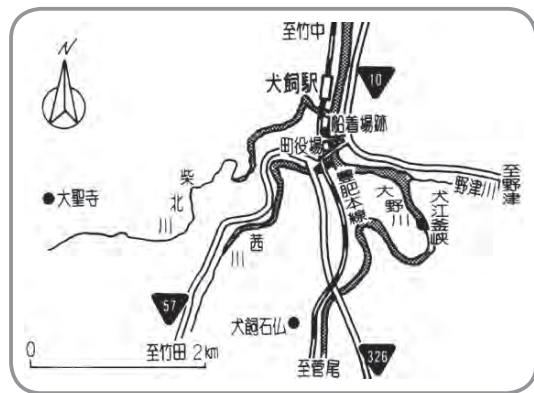
■繁盛した川の港町

同藩では犬飼港を参勤交代の船着き場として利用するほか、年貢米をはじめ領内の物産の積み出し港、あるいは領内への輸入港として積極的に使った。

このため御茶屋や藩屋敷をはじめ、蔵所な

どが設けられ、奉行のもとに御船頭役、御蔵手代など17人の役人がいた。また、当然のこととして船頭、水夫たちの住居もあり、町なみができていったし、商人たちもたくさんやってきた。文政3(1820)年の記録によると、79人の町人がいて、うち47人までが他国の出身者である。

御蔵のあったのは現在の浄竜寺あたりで、隣の町立保育園の位置に奉行の役所、その下の川岸が船着きの棧橋だったというが、いまは何も残っていない。ただ、すぐ近くの柴北川合流点にある岩に線刻の波乗り地蔵の像が見られる。



犬飼駅開業：大正6
(1917)年7月20日開業

■近代まで続いた通船

大野川に船を通したのは岡藩ばかりではない。臼杵藩も大野郡にもっていた藩領の三重町や野津などの年貢米や物産を輸送するため港を設けた。船着き場の位置は犬飼の対岸を少し上って、野津川が本流に合流する吐合と呼ばれたところで、役所も置かれていた。

これら二つの港から、岡藩の船は大野川河口の三佐まで、臼杵藩の船は同じく家島までをつないだが、川を利用したのは藩船のほか商人らの船もあったはずだし、一時は更に上流の細長、岩戸の河岸から沈墮の滝の下まで船が通ったものである。

船運は明治時代になってからも続いた。明治14(1881)年の大分県統計によると河口までの間に14の河岸があり、船問屋が16、船数は215隻にのぼっていたようだ。もっとも、この船のすべてが犬飼あたりまで上ってきたわけではないだろうが、たいへんにぎわっていたことはわかる。


犬飼の町がにぎわったことに加え、犬江釜峡(けんこうふきょう)を中心に風光にも恵まれていることから、文人墨客の来遊も多かったようだし、その

影響で絵画や詩文、俳諧(かい)に親しむ町人も少なくなかった。

犬飼駅の開業、さらに豊肥本線の開通によって通船は次第にさびれ、幕を閉じたが、現在も犬飼町が水にかけける期待は大きい。「アユの町」の名で観光的に売り出しをはかっているほか、5月にはドンコ釣り大会も開かれる。水によって成立した町だけに、今後も大野川を忘れないでほしいものだ。

■豊後磨崖仏ルート

犬飼でもう一つ重要なものは犬飼石仏であり、大野川流域の諸石仏を訪ねる「豊後磨崖仏ルート」の東の入り口にあたる。石仏は不動明王と二童子で、国の史跡。不動さまは両眼を見開いて、どっしり座っていらっしやる。このほか右手の岩壁に小さな龕(がん)が16個ほどほりこまれており、その中に高さ30センチ程度の一石五輪塔が一基ずつ納められているのは珍しく、県史跡。

また左手の岩に板碑と塔が線彫りされているほか、岩壁下に大友氏の将、吉弘一曇の供養のためという五輪塔はじめ、たくさんの石塔類が並んでいる。 

<メモ>

周囲にある名所旧跡等(駅からのおよその距離)

◇大野川通船の船着き場跡(0.5キロ)

◇犬江釜峡(大野川と野津川の合流点から上流へ約1キロの間。合流点まで2キロ)

◇ドンコ釣り大会(毎年5月5日。会場は駅の対岸あたり。1キロ)

◇犬飼石仏(3.5キロ)

◇大聖寺(大友十三代親綱の墓である宝篋印塔など。5.5キロ)

⑥7 菅尾・三重町①

多くの磨崖仏や古墳群



菅尾・三重町駅開業：両
駅とも大正 10（1921）
年 3 月 27 日

◀ 県を代表する磨崖仏の一
つ・菅尾石仏

■豊後磨崖仏の代表格

鉄道は大野川本流の峡谷部から三重町に入り、まず菅尾駅を置く。大野川流域の磨崖仏群のなかでも美術的に見て最もすぐれ、白杵石仏と並んで大分県を代表する菅尾石仏（国史跡・重文）のあるところ。

石仏は通称を岩権現、五所大権現などという。駐車場から細い道をたどり鳥居をくぐると石段があり、手すりに頼って登りつめると静かな仏の世界に導かれる。

向かって左から千手観音、薬師如来、阿弥陀如来、十一面観音の各座像と多聞天の立像。いずれも高さ2メートル近く、岩壁に厚肉彫りされている。特に四座像は丸彫りといってもよいほど。二重光背を持ち、彩色の跡もかなりあざやかに残っている。多聞天が持っている剣に反りがあることなどから、平安後期の作らしい。

注目されるのは四座像の配列。これは熊野権現の中心となる神々の本地仏にほかならない。つまり、この石仏は熊野信仰と仏教の結びつきを示しているわけで、権現の呼び名といい鳥居の存在といい、神仏習合の姿を濃く伝えている。ともあれ、大野川古

代文化の代表的な遺産である。

付近の大野川は明るい水景で、宇対瀬にヤナもかかっている。自動車がやっと渡れる沈み橋があり、渡れば千歳村。新しい橋の計画もあり、将来の観光地として期待されるところだ。

■古代からの交通要地

三重町駅の駅前一带は市場と呼ばれており、商店街もかなり発達している。それでもわかるように、この地は大野郡の交通、経済、文化の拠点であり、古代もそうだった。

例えば、『豊後風土記』は大野郡に駅が二カ所、烽（のろし）が一カ所あったと伝えるが、その一つである三重駅はこの地に置かれていた。もう一つの小野駅はかつて大野郡だった宇目町の小野市に設けられたもので、これについては日豊本線の重岡駅の項で述べた。

烽は佩楯山にあったらしい。三重町と本匠村との境にあり、県南部を斜走する山なみのなかでも特に目立つ山で、標高754メートル。かつて灰立山と書かれたのも、烽に関係したからだろうか。烽は昔

の遠隔通信の手段だが、現在でもテレビや各種電波の中継塔が山頂に立ち並んでいる。

また、古墳の多さも古代の繁栄を語っている。大野地方最大の全長70メートルの道ノ上古墳はじめ、大塚、重政（以上県史跡）秋葉塚などの前方後円墳が見られる。

■三国峠と内山観音

楯橋山から連なる山なみには、日向（宮崎県）方面と結ぶいくつもの峠があったことも重岡駅のさいに述べたが、そのなかでも有名なのが三国峠で、かつての官道であり、いまは国道326号線となる。現在、道路の大がかりな改修工事が進んでおり、いまの道は近く旧道となってしまうが、桜の並木などがきれいで、春には「桜ロードレース」も開かれる。

駅のある町中心部から峠に向かう途中で内山観音と呼ばれる蓮城寺があり、ここも桜で知られる。

だが、それ以上に有名なのは、真名野長者の故地だということ。長者になった炭焼小五郎の話は全国各地に残っているが、その伝説が最も色濃く伝わっているのがここ。同伝説の発祥の地なのかもしれない。

本堂の大悲閣には33年に一度の開帳が行われる秘仏の千手観音。薬師堂には薬師如来、日光、月光両菩薩を中心に1008体にのぼる薬師立像がある。さらに、これも秘仏の一寸八分の観音像を安置した奥の院の長者堂はじめ、弘法像の大師堂、聖徳太子像の六角堂などもある。

石造品も多い。うち宝塔三基が県文化財に指定されている。薬師堂横の二基は重厚な感じで、真名野長者夫妻の墓という伝説がからんでいるが、銘文と大友文書などから永仁4（1296）年のものらしい。残る一基は大悲閣前にあり、文中4（1375）年の銘が見られる。



<メモ>

周囲にある名所旧跡等（駅からのおよその距離）

- ◇菅尾石仏（菅尾駅から2キロ）
- ◇道ノ上古墳（三重町駅から2.5キロ）
- ◇大塚古墳（同3キロ）
- ◇重政古墳（同1.5キロ）
- ◇内山観音蓮城寺（同3.5キロ）
- ◇三国峠（同12キロ）
- ◇吉祥寺（同3キロ）
- ◇市辺田八幡社（同1キロ）
- ◇白山溪谷（同13キロ）
- ◇稻積水中鍾乳洞（同16キロ）
- ◇大白谷（同21キロ）

⑥8 菅尾・三重町㊦

脚光浴びる稲積水中洞



◀ 幻想の世界を思わせる稲積水中洞

■数多くの文化財

内山から山をへだてた東の谷である松尾川流域も、峠に通ずる古い道筋だった。天正14(1586)年10月、豊後に侵入した薩摩の島津家久軍は日向境から柴田紹安の内応によってなんなく三重まで進出、この松尾で城山に陣をとった。以来、ここを根拠地として各地の城を攻め落とし、ついには府内まで手を伸ばした。

松尾山近くの吉祥寺には、このときかろうじて兵火をのがれたという木造の大威徳明王がある。明王がまたがる牛の胎内に弘安7(1284)年の銘があり、県の有形文化財。また、この地の松尾神楽は県無形民俗文化財である。

三重町内にはこのほかにも文化財が数多いが、もう一つ、県文化財の市辺田八幡社の阿弥陀如来像を紹介しておこう。高さ3メートル近い木造の座像で、細かく寄せ木されているのが特徴。社殿の横の堂に安置されており、堂内が暗いためちょっとのぞいただけではなんにも見えないが、目がなれてくるにしたがって尊容が浮かび上がってくる。宇佐・大善寺の薬師如来とともに、鎌倉時代木造仏として大分県を代表するものである。

自然では中津無礼川がいい。同川は大野川の支流の

支流、つまり二次支川だが、それでも30キロを超す長い川で、途中に白山溪谷の勝景がある。水は清く、それが大小の岩や断崖からんで美しい景観をつくる。ホゲ岩橋や轟橋などの石造アーチ橋がそれに趣を添え、5、6月にはホタルの群れが飛びかかって納涼客も多い。

■傾山の登山口

上流部は大白谷といい、祖母・傾山群の一方の雄である傾山(1602メートル)の登山口となる。穴権現社の社叢は県の天然記念物。

このように白山とか白谷とか、白のつく地名は白い岩石のあるところ、つまり石灰岩地帯に多くみかけるもので、鍾乳洞もしばしば存在する。穴権現もその一つだが、白山溪谷で昭和52(1977)年に開発された稲積水中洞は観光的に大評判となっている。

鍾乳洞と水はつきものだが、ここは特に豊かで、洞内のいたるところに澄んだ水がたたえられ、水中深く



伸びる鍾乳石はまさに幻想の世界。一度できた洞が阿蘇山の噴出物で口をふさがれて水没したもので、観光開発にあたって排水したが、それでもあちこちに深く水がたまっている。水中に鍾乳石の柱がみられるのも水没のせいである。

■広がる台地と畑作

産業的に注目されるのは畑作であろう。三重町に限らず、大野郡一带は名の通りの大きな野で、平坦部もかなり広い。しかし、これらは大野川とその支流に刻まれて台地状になっており、川の水量は豊かなものの水利はどちらかというと不便で、水田を開くには苦労したものである。このため、古くから畑作に頼ることが多かった。

その代表的な台地の一つが、菅尾と三重町との間の三重原あたりである。鉄道は浅い谷ぞいを通っているため車窓には水田が見られるが、その両側は台地となり、かなり広い。大分市にあった空港が臨海工業地帯の造成によって移転することになったさい、その候補地の一つにあげられたのが三重原だった。飛行場といえば、隣の千歳村にある鹿道原に軍用として2000メー

トル滑走路が造成されたことがある。昭和 20 (1945) 年 3 月に着工したが、間もなく終戦となって使われないうまま、現在は畑地に戻っている。

■農業の研究と実践

こうした畑地では麦をはじめ穀物、野菜類のほか、葉タバコや茶、クリ、ウメ、カボスなどの栽培が行われ、さらに肥育牛や乳牛などの畜産が盛んである。

このため明治 35 (1902) 年には郡立の農学校が設置され、続いて大正 7 (1918) 年には県立農学校も移転してきた。現在では三重農業高校のほか、農業試験研究と農業教育を総合的、効率的に進めるため昭和 41 (1966) 年に県の農業技術センターと農業実践大学校が置かれ、畑作農業の中心となっている。

なかでも桑と、それに伴う養蚕は古い歴史を持ち、明治 33 (1900) 年には羽飛に製糸工場が設けられ、大正初 (1912) 年には生糸生産額 1300 キロを記録している。このほか葉タバコに伴う専売公社の原料工場も赤嶺に置かれていたが、昭和 58 (1983) 年春に閉鎖された。江戸時代には紙の生産も広く行われていた。

69 牧口

繁栄した砂田市場

牧口駅開業：大正 11
(1922) 年 11 月 23 日



◀ かつて大にぎわいした砂田の町並み

■商品流通の中心地

駅から南西に少し行った高台に砂田というところがあり、役場もあって清川村の中心となっている。商店も並んでいるが規模は小さい。主要道路が豊肥本線沿いに走っているため、村外の人が訪れる機会は少ない。しかしここには、上市、中市、下市といった地名があり、なにかを物語っているようだ。それは、かつてこの地で大がかりな市が開かれた名残ではないだろうか。

そうなのである。ここは江戸時代から明治にかけて、緒方郷一帯の商品流通の中心地としてたいへんなにぎわいをみせ、大分方面はおろか、遠く阪神方面から物資や人が入っていたところなのである。

元文2(1737)年、太田伊左衛門という人が、ここに市場を開く許可を岡藩からもらった。道幅3間に長さ180間ほどを範囲として、出見世、小屋掛けをし、人を集めた。これが砂田市場の始まりである。

■歓楽街となる

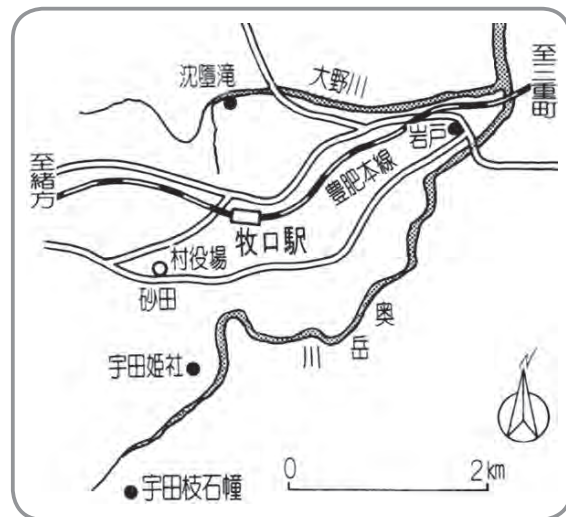
ここで商売したいと思う人は、すべて伊左衛門

の支配下に置かれたが、岡藩では市場奨励の意もあってか、税金をいっさい取らない、つまり無運上の特権を与えたのである。市場が繁盛したのは当然のことである。

明治に入ると、砂田市場はますます栄えた。というのは、大野川通船の岩戸港

ができたからである。犬飼港からさらに上流に船をのぼらせ、岡城下(竹田)からの陸上運送の距離を縮めたいというのは江戸時代からの念願だったが、途中で臼杵藩領がはさまっていて、実現できなかった。

その問題を解消したのが廃藩置県だったわけ。明治5(1872)年、さっそく船着き場と航路整備の工事が始まり、次の年に完成。岩戸港は砂田市場の



玄関となった。これによって市場の規模はぐんと拡大、大分を経由して阪神との取引も行われるようになった。

市場には宿舎、馬車屋などが並んだほか、料亭、飲食店、さらには芝居小屋まで建ち、歓楽街の様相を呈したという。

■市場衰退と森林軌道

それが急速にさびれたのは大野川通船の衰退だった。大正6(1917)年に犬飼まで来た鉄道で水運は次第に陸運に切りかえられ、大正11(1922)年には牧口、緒方が開駅、13(1924)年にはついに鉄道が竹田まで入った。砂田を経由していた物資は鉄路で直通するようになり、市場は使命をおえたのである。

鉄道は市場に不利だったが、その代わりに、村の南部にある広大な森林の開発を促進することになった。それまでほとんど手のつけられなかった豊富な資源が、輸送の手段を得たのである。昭和8(1933)年、牧口駅から傾山のふもとに至る12キロの森林軌道建設が始まり、10(1935)年に完成した。

傾山国有林で伐採された木は軌道で運ばれ、駅の横の貯木場に集められたあと、鉄道で全国各地に送り出された。伐採がヤマを越したことや、トラック便の充実で軌道は30(1955)年に廃止されたが、伐採はいまでも続き、貯木場はまだある。

ただ、伐採によって祖母・傾山群の原生林は無残な姿になった。特に戦時中と戦後の乱伐はひどく、山の荒廃が問題になっている。



<メモ>

周囲にある名所旧跡等(駅からのおよその距離)

◇岩戸遺跡(後期旧石器遺跡として注目される。3.5キロ)

◇沈墮滝(3.5キロ)

◇宇田姫社(大神氏出自伝説の姫の地という。2キロ)

◇宇田枝石幢(県文化財。4キロ)

◇六種石造宝塔(同。6キロ)

◇石原石仏(8キロ)

◇御岳山・同神社(豊後神楽の源流・御岳神楽の起こったところ。10キロ)

⑦〇 緒方①

5000 石の米どころ

 緒方駅開業：大正 11
 (1922) 年 11 月 23 日

■緒方惟栄の地

牧口を出てほどなく、列車が緒方川を渡ると車窓の風景は水田に変わる。緒方平野である。緒方川を軸とした逆 S 字形の細長い平野で、緒方町の中心となる町なみや緒方駅は、その中央部北端に位置している。

緒方 5000 石といわれる米どころで、豊後大神氏の頭領としてこれまでたびたび書いた緒方三郎惟栄の故地である。広がる水田のなかに、彼の居館跡と伝承される地があり、碑が建っている。このほか、この平野には惟栄にまつわる話がいへん多い。

例えば、平野の北と南の山つきに鎮座する緒方三社八幡は彼の建立と伝承されているし、居館跡の近くにある三反畑板碑（県文化財）も、それが斜めに突きささるように立っていることから、彼が八幡社の境内からつかんで投げたものだといわれている。

◀ 緒方惟栄の居館跡に立つ碑



板碑は天授3（1377）年の銘をもち、惟栄の時代よりぐんと下るが、すべてを惟栄に結びつけるのは、彼を郷土の誇りとする人々の心情からだろう。また、板碑は県内でもまれにみる大きさで、一人で持ち上げるのは不可能だが、それを投げたというのも、惟栄を愛し、怪力の英雄とみる人々の気持ちから出たものにほかならない。

■米を支える井路

ともあれ、緒方平野と、それを取り巻く山野や河谷は豊かである。その緒方郷の郷司職を手にし、緒方氏は豊後武士団の雄としてのしあがっていく。緒方平野は、彼らにとってはゆりかごに等しい土地だったろう。

しかし、その平野が5000石の名をもつようになったのは、実のところ江戸時代になってからである。平野の中央に川はあるものの、深い谷となっているため水利は不便で、かつて平野は周囲の台地からの水に頼っていた。だが、その水量は少なく、干害に弱い。この心配を解消し、収量を上げるには上流から水を引く以外にない。

こうしてつくられたのが上下二つの緒方井路である。上井路は延長およそ12キロ、下井路は8キロ。正保2（1645）年に開削が始まり、寛文11（1671）年にほぼ完成したらしい。このほか江戸期に広瀬、長淵、小原などの井路も掘られ、元禄14（1701）年には溜め池の荒平池もできあがった。

これで豊かなみのりが約束されたわけで、人々は井路に感謝し豊作を祈るため、毎年9月23日に「五千石祭」を催している。なお、井路にかかる揚水の水車は緒方名物だったが、近年は急速に姿を消し、いまわずか数基になっているのはさびしい。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

- ◇緒方惟栄居館跡 (1.5キロ)
- ◇三反畑板碑 (2キロ)
- ◇原尻滝 (3.2キロ)
- ◇宮迫東・西石仏 (2.5キロ)
- ◇尾崎石風 (7キロ)
- ◇辻河原石風呂 (5.5キロ)
- ◇原尻橋 (4キロ)
- ◇大石遺跡 (14キロ)
- ◇尾平 (28キロ。祖母山頂まで徒歩3.5時間前後)
- ◇九折 (23キロ。傾山頂まで同3.5時間前後)

⑦1 緒方①

幅 120 メートルの原尻の滝



◀ 『東洋のナイアガラ』とも呼ばれる原尻の滝

■色あざやかな磨崖仏

平野の上流部のはずれに近いところに、東洋のナイヤガラ、とも呼ばれる原尻の滝がある。幅 120 メートル、高さ 20 メートル。水田の広がりやをながめて行くと、急に目の下に滝がかかっているのどびっくりする。平野でこれだけの滝が見られるのはあまり例がなからう。

毎年 12 月、この滝の上の浅瀬で川越し祭りが行われる。ふんどし一つの若者たちが、寒風をものともせず、威勢よく流れを渡って行くさまは勇壮である。その若者たちが参拝する八幡社の丘の裏手に緒方宮迫東、同西の磨崖仏がある。

いずれも国史跡。平安時代の作とみられている。東石仏は向かって右に不動明王、左に多聞天と仁王を配した大日如来の大きな座像。やや身体を後ろにそらした姿である。西石仏はすぐ近く。こちらは右から弥陀、釈迦、薬師の三如来。三尊形ではなく平等並列。

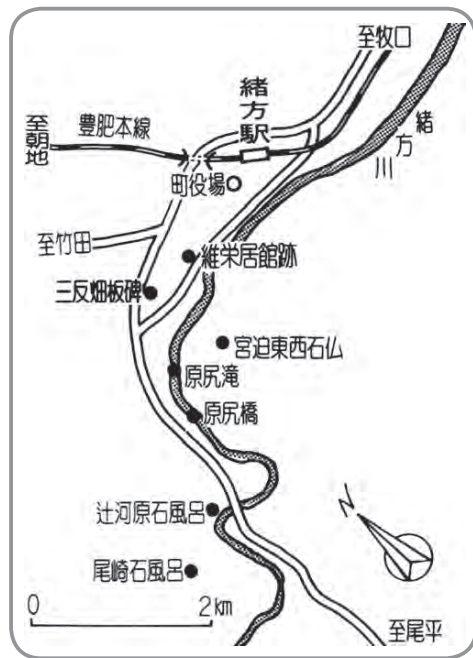
ともに丘の中腹の浅い窟内に厚肉彫りである。彩色もよく残っており、特に西石仏はたいしゃ色の肉身、朱と墨の衣、暗紅色の光背があざやかだ。

■石風呂がたくさん

石仏の近くの野中に石風呂があるが、こうした石風呂がたくさんあるのも緒方町の特徴である。10 余カ所にあり、このうち尾崎石風呂は国の重要民俗文化財、さらに辻河原、市穴など四つが県文化財である。

いずれも水の便のよいところを選んで岩壁に横穴を掘り、なかに板状の床石を並べ上を浴室、下を火室に分けている。下で火を燃やし、床石が熱くなったらセキショウなどの薬草を敷いて水をかけ蒸気を立てる。この中に入って身体を温め汗を出すわけで、現代流に言えばサウナである。いまでも町内外から入浴者があるといい、生きている文化財だ。

石造のアーチ橋もある。よく知られているのは原



尻の滝の上流にかかる原尻橋。大正 12 (1923) 年の架橋で、五連の美しいアーチが水面に映える。時代的には新しいが、これもまた現在に生きている文化財といえようか。

このほか文化財では三宮社の境内から出た永久 3 (1115) 年銘の経筒、大行事八幡社の大治元 (1126) 年の経筒がともに県文化財。遺跡では縄文の大石遺跡が注目される。集会所と思われる大きな土坑（どこう）が発掘されたほか、石包丁、石鋤（くわ）、石皿などが出土、縄文時代の終わりごろから農耕が始まったのではないかと推測され、学界に波紋を広げた。

■祖母・傾の原生林

町の南部は祖母・傾山群である。祖母山 (1757 メートル) はじめ、障子岳 (1703 メートル) 古祖母山 (1633 メートル) 本谷山 (1643 メートル) 傾山 (1602 メートル) などが宮崎との県境に連なり、男性的な山岳美を見せる。

特色は岩峰・岩壁と溪谷、そして原生林である。その樹林は西南日本を代表するもので、みごとな垂

直分布をみせ、国の特別天然記念物ニホンカモシカが生息する。ただ、一部は学術林として保護されているものの、国有林がかなり伐採されているのは残念。伐採反対運動が起こるほど、国土保全、水源涵（かん）養などの面を含めて自然保護が当面する大きな課題である。

登山口となる尾平、九折はかつての鉱山で、にぎわったところ。特に尾平鉱山は正保 4 (1647) 年に岡藩の手で開発されたという歴史がある。閉山後は建ち並んでいた社宅もなくなりさびしくなったが、青少年旅行村が昭和 49 (1974) 年に開村した。

夏は登山者や川上溪谷探勝者などがやってくるし、町内の若者たちの手で開かれる尾平音楽祭も有名になった。深い谷からけわしい峰にかけて、若いサウンドがこだます。



72 朝地

歴史豊かな自然休養村

朝地駅開業：大正 12
(1923) 年 12 月 20 日



◀ 大野文化の華として伝
わる神角寺

■大野文化の華

自然休養村に指定され、整備を進める朝地町の三大名所は神角寺、用作公園、普光寺磨崖仏であろう。町域の北と南にあり、九州自然歩道で結ばれる。このコースは朝地駅で豊肥本線と十文字に交差する。

神角寺は標高 750 メートルの山上にある。大分市南部から御座ヶ岳、雲ヶ背山、鎧ヶ岳と連なってきた山なみの一角で、大分県ではいま、この連山を「県民の森」として整備しており、神角寺はその拠点の一つである。

大野文化は石仏、あるいは〇〇寺などといった地名の多さからみて、古代から中世の初めにかけてたくさんの寺を建てていたとみられるが、現在はほとんど廃絶している。そのなかにあって、神角寺はいまに伝わる大野文化の華といってよからう。

寺伝によると、欽明天皇 31 (570) 年に新羅の僧によって創建され、のち三六坊が建ったが建久 7 (1196) 年に兵火で焼失、応安 2 (1369) 年、大友氏によって中興され次第に整備されたという。

■国重文の古建築

現存する本堂は当時の六坊のうちの東ノ坊といわれ

る。単層の宝形造りで、桁(けた)行、梁(はり)間ともに三間。栓皮(ひわだ)の屋根が端正な反りをみせる。全体に和様と唐様を自由に取り入れ、室町期の建築様式を伝えるものとして国の重文になっている。国宝の富貴寺大堂とともに大分県を代表する古建築。山門にある運慶作といわれる仁王像も秀作で、昭和 57 (1982) 年に国重文となった。

寺の周辺はシャクナゲがたくさん植えられ、花どきはみごと。花のトンネルをくぐっての散策も楽しみだが、国見台にはぜひ立ってみよう。大野川流域が一望できる。

その台の一隅に古い塔があり、大野九郎泰基の墓と伝える。大神氏の一族で、大友氏が豊後に入るさい抵抗して討ち死にしたといい、神角寺一帯がそのさいの戦場となった。先に建久 7 (1196) 年の兵火といったのは、このときの戦いである。山のふもとの鳥屋(とや)にある神角神社は明治の神仏分離まで山上にあったそうで、神仏習合の昔を語っている。



■紅葉の用作公園

用作公園や普光寺は駅の南。用作というのは豪族の手作り地のことで、ここは中世に一带を所有した志賀氏の用作田があったところ。江戸時代には岡藩領で、寛文4（1664）年に家老の中川平右衛門に与えられ、以来、池を中心に庭園として整備された。約3ヘクタールにカエデの古木が多く、秋の紅葉で知られる。南画の田能村竹田も何度か訪れている。

普光寺の磨崖仏（県史跡）は高さ約8メートルの不動明王で、大分県下で最大のもの。二童子とともに彫りは比較的浅く、明王とはいえ表情はおおらかで親しみを抱かせる。鎌倉時代らしい。

石仏の向かって右手に大きな二つの窟が掘られ、左に大日如来などをまつり、右の洞内には堂が建つ。この堂の横には藤原期のものと思われる多聞天が岩に彫られている。

近くの上尾塚には八角の塔身をもつ石幢（県文化財）が立っており、暦応2（1339）年の銘がみえる。

■朝倉文夫「愛の園生」

朝地町はまた、朝倉文夫<明治16（1883）年～

昭和39（1964）年>の出身地である。近代日本彫塑界で写実主義の基礎を確立した人で、昭和23（1948）年に文化勲章を受けた。

神角寺から自然歩道を下ってきた谷間の池在が生地で、生前、彼はここに温知会館を建て、それを中心に「愛の園生」をつくろうとした。町では遺志を継ぎ、自然休養村計画にあわせて、ここに屋外彫刻公園を考えている。

昭和58（1983）年は生誕100年にあたり、秋に大分県立芸術会館で大がかりな記念展が開かれた。銅像をはじめとして、彼の作品は県内にたくさんある。

銅像といえば、朝地駅前には駅開設に力を入れた代議士、吉良元夫の胸像がある。計画当初、鉄道は緒方から竹田に直通させる予定だったが、地元選出の吉良代議士が関係当局に強引に働きかけて朝地駅を設けさせた。

豊肥本線全図を見ていただければわかるが、鉄道は朝地に寄るため大きくカーブしている。これを地元では「吉良曲がり」といまでも呼ぶそうだ。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等（駅からのおよその距離）

- ◇神角寺（10キロ）
- ◇用作公園（1.5キロ）
- ◇普光寺磨崖仏（3.5キロ）
- ◇上尾塚石幢（3.5キロ）
- ◇愛の園生（4キロ）
- ◇志加若宮社（景行天皇伝説の志我神ののちという。4キロ）
- ◇深山八幡社（県無形民俗文化財の深山神楽を伝える。4.5キロ）
- ◇志賀城跡（5.5キロ）
- ◇小牟礼城跡（3.5キロ）



デジタルブック版

「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（16）

2007年6月15日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター

発行 NAN-NAN事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトをご利用下さい。